特別寄稿

大分県の中の「朝鮮」

亀川中央町（賛助会員）　溝部　仁

はじめに

私はこれまでに二十数回にわたり、仕事で韓国を訪れていた。空港に到着するやいなやハングル文字があふれているのである。よし意味はわからなくとも、韓国語を読めるぐらいは努力してみようと考えた。遅々として進まないが、現在韓国語を独学で勉強している。

このような体験から、大分県には、ホウヤク祭・牛馬信仰・ケスベ祭りなど民俗的にみても貴重な行事がある。しかしながら、これらの行事は、これまで、朝鮮語で解読されたことはあまりなかったように思う。そこで、浅学非才な知識で、大分県の中の朝鮮を少し考察してみたいと思った次第である。ご一読いただきたい。

一　中国、韓国の六大学と交流

現在、本学は、中国の瀋陽・鞍山・烟台にある学校三校と友好校の交流をしている。また、韓国ソウル・釜山・慶州・大邱・蔚山と忠南道（百済の古都扶余の近隣）にある大学六校とも友好校の交流を続けている。

それぞれの学校の所在地は、我々に馴染みが深い町ではないかと思っている。中国瀋陽は、戦前「奉天」と呼ばれていたことはご承知のとおりである。鞍山は、山崎豊子著『大地の子』の舞台となった製鉄で有名なところ。また、烟台市は、別府市と姉妹都市であり、我が国と関係が深い。烟台市の旧名は芝罘といい、健康に良いといわれる「霊芝」（万年茸の漢名、瑞草とされる）がないということから付けられた。秦の始皇帝が徐福に命じて東海に不死の仙薬を探しに行かせたが、これを見付けることが出来なかった。帰れば殺されるので、日本に渡って定住したという（熊野、富士山麓など諸説

仏教伝来の碑

あり）。佐賀や和歌山などに徐福の墓もある、という。

韓国ソウルと釜山については、あまりにも有名なので、説明を省きたい。慶州は、新羅の古都であり、歴代の大統領（金大中前大統領は百済の出身）を輩出していることでも有名である。大邱は、リンゴで有名な町。戦前は、かなりの量を日本に出荷していた。忠南道は、白村江の戦があった周辺で、仏教伝来の「碑」もある（写真）。是非とも実地見学をお勧めしたい。

最後に、蔚山であるが、朝鮮出兵の時、大友軍が全滅したと伝えられている。この学校の校長、李秉稷先生（現在、韓日親善協会副会長）が校長在籍中、毎年夏三十五名の生徒を連れて日本語研修に来られていた。平成元年に本学を訪問された時、衝撃を受けた。—

本学は、昭和二十八年から毎年全国手工芸展に学生・生徒の作品を出品し、文部大臣賞をはじめ数々の賞を受賞している。数ある作品の中で、姫島の「きつね踊り」をご覧になった先生は、「新羅の踊りですね」とさり気なくおっしゃった。また、宇佐八幡宮をご案内した時にも、「新羅造りですね」、と。オーバーではなく、鳥肌が立つ思いであった。これが、私が歴史を学ぶ端緒となった。一年目の訪問の帰りに、阿蘇大社に参詣に行った。二年目も最後に、阿蘇大社に参詣に行くという。そこで、「先生、何故、阿蘇大社に行かれるのですか」と尋ねた。先生は、「文禄慶長の役の時、阿蘇大社の氏子が朝鮮に寝返ったので、日本が負けたのです」（1）。これまた、驚愕するような答えが返ってきた。

二年目には、姫島の比売語曾神社にも参拝に行かれた。これで判るように、九州、なかでも大分県には、朝鮮半島の影響を色濃く受けた「文化・民俗等」（2）の存在を推理しうるのである。

二　宇佐周辺を考察してみる

宇佐八幡宮に関係の深い川に、駅館川というのがある。まず、疑問に思うことは、駅をなぜ「ヤッ」と発音するのだろうか。韓国語で、駅の事を역という。読みは、「ヨク」という。館は관と書き、読みは、日本と同様に「カン」という。合わせて、「ヨクカン」である。何度も発音すると「ヤッカン」と聞こえないだろうか。

説明するまでもないが、古代宇佐八幡宮周辺には、多くの渡来人が住んでいたことが推理される。宇佐八幡宮の「シャーマン」（3）で有名な「辛嶋」氏がその代表である。また、大宝二年の戸籍（4）でも「秦」氏が数多く住んでいる。秦氏については諸説があるが、公認されているものとすれば漢音は「シン」で、シンは「辛」に通じ、韓国を指すと

言われている。私は、さらに敷衍して「秦」は「幡」ではないか、と思っている。このように考えると、「八」は数多いとの意味もあるから、「八幡」の由来も推測できるのではないか。事実、八幡は現在のように「ハチマン」といわず、「ヤハタ」といっていた。そのことが何より傍証になろう。

三　三重町周辺を考察してみる

三重町に白山という集落がある。いまでも〝蛍〟で有名である。このルーツは石川県加賀市の霊峰白山である。ここには加賀（今の石川県の南部）一の宮、白山比咩神社がある。この祭神は、菊理姫（比売）である。「キクリヒメ」とは称さず、「ククリヒメ」という。なぜ、菊をそう呼ぶのか、不思議に思わないだろうか。

朝鮮語で鞠のことを子と書く。菊の花を子와と書く。鞠の発音は、「クゥ」という。日本人には、非常に発音しにくい。ちなみに、菊の花は、「クゥ クゥ」という。別説をあげると、高句麗姫から由来したというものもある。玉井敬泉氏は「秦澄（白山比咩神社の開祖）が白山嶺上で祀ったのは高句麗媛であるに相違ない。『こうくりひめ』の発音が『くくりひめ』と転訛するのは当然で、自然の形態である」（5）と述べていることも、この傍証となるであろう。

さらに、『神道の本』（6）に次のような記述がある。―古代アジア東北部に、「靺鞨」と呼ばれるツングース系の民族がいた。その中に、「白山部」という枝（支）族がいた。そこで、この白山部の中で育まれた白頭山＝太白山信仰が日本海を渡ってもたらされたという説もあり、いずれにせよ白山信仰を考える場合には、古代朝鮮を経由して日本にもたらされたと記載されていることが大変参考になる。白山比咩神社の由来はわかったが、ただ単に、この山で修験道の修行をしたわけではないように思える。

この点について、示唆を与えるのが保井克己氏の論稿である。氏の説に従えば、「ツングース族の白頭山信仰が白山信仰に関連している蓋然性は非常に高くなる」（7）、と。しかし、これだけの理由で加賀を発信し、全国的に白山信仰が拡大した理由にはなるまい。もっと、インパクトのあるものを探さなければならないように思う。このヒントとなるのが、白頭山の頂上に有る。白頭山といえば、われわれは、緯度も高く、また高山なので山頂の雪を想像するが、そうではない。

竹内亮氏は「一般には往々、山上四時白雪を戴くの故を以ての名と誤伝されるが、実はしからずして、山上が灰白色の軽石で被われているので白く望まれることに由るのである」（8）と述べている。このことがヒントになりはしないだろうか。

次に、県内の白山社を調べてみると、白頭山のように山頂に雪はないので、当然石灰岩台地に聳(そび)える山を白山とよんだであろうことは、想像にかたくない。

そこで、まず、豊前・豊後の「白山信仰」について少し述べてみよう。明治の廃仏毀釈のはげしかった英彦山から原始信仰を探ることは困難なので比較的、文献資料が整っている求菩提山(くぼてやま)からその信仰の時期を考察してみたい。

求菩提山の信仰の発生について、小田富士雄氏は「求菩提山信仰の発生をどの時点に求むべきであるかという問題は、後世に成った諸記録では大化以前までさかのぼらせている。この種の記録は、とかく後世に作為して古くさかのぼらせることが往々にしてみられるので、現存する記録の内容を傍証しうるような別史料でも現存しない限り、証明することはむつかしい」、と。そこで考古学上の物的資料に求めてみると「幸いにも『重松敏美氏』(9)が山中を長年にわたって踏査収集された資料のなかに須恵器がみられる。……中略(求菩提山八合目)付近には湧水もあり、生活できることから、すでに六世紀にさかのぼって入山者があったことを証するものであろう」(10)と述べていることを参考にすれば、八幡神が成立しようとした頃に求菩提山の信仰が発生したと考えることが出来よう。

英彦山の場合も、ほぼ同様な経過をたどったと思われる。残念ながら英彦山においては、法連や人(にん)(仁)聞(もん)の活躍に置き換えられ祭神をのぞく白山信仰は、現在全く抹殺されている。従って、さらなる視点から白山系の痕跡(こんせき)を調べてみることにしたい。故松岡実氏から、白山を祭祀する山や寺社をかって踏査していた資料をいただいたので、これをここに発表して故人の霊前にお供えし、深甚なる謝意を表したい。

四　白山社を祭る寺社

白山関係寺社	祭神	特徴
英彦山(11)	中岳女体権現	水晶が産出
等覺寺(12)	白山妙理大権現	鐘乳洞がある
求菩提山(13)	白山妙大権現	
松尾山医王寺(14)	二佐羅王子	
倉持山(15)	白山社奉祭	メサ地形【注1】
檜原山正平寺(16)	白山権現	石とメサ地形
仙岩山宝陀寺(17)	五社道上人開基	白山権現出現
御許山正覺寺(18)	白山権現天音	
貫嶽権現(19)	白山妙理大権現	水晶山
三重町大白山(20)	白山権現	水精石英産出
野津町白山(21)	白山権現	鐘乳洞

【注1】水晶や黄銅鉱のような鉱石の結晶体を含有する地形。

これまでの結論をまとめてみると次のようになる。

a　水晶（水晶）に関係する山
　英彦山（八角沢村の大水精石）・貫獄水晶山・三重町白山

b　鍾乳洞に関係する山
　等覺寺・三重町白山・野津町白山

c　霊石に関係する山
　求菩提山・檜原山・御許山

d　白い山（石灰岩または花崗岩）
　等覺寺・貫獄・三重町白山・野津町白山

e　メサ地形
　英彦山・求菩提山・等覺寺・檜原山・倉持山・仙岩山
　三重町白山

五　石灰岩と三重町白山

さて、これまで述べてきたように、本県や周辺にある白山信仰は神道や仏教というよりも、いずれも鉱石や山の形状に関係があると思われる。

原始白山信仰は、鉱山と密接な関係をもって開発されたのではないだろうか。こうした鉱石はその応用として、医薬にも利用されてきた。たとえば、水晶は不老不死の秘薬とされ、鍾乳石は、求菩提山の秘薬「五宝丹」の主薬として用いられている。これは、加賀白山の秦澄が開山したと伝えられる医王山のラジューム鉱が、現在まで医王ラジュームとして活用されていることからもうなずけると思う。

白山の原始信仰は、北九州から山陰・北陸石灰岩地帯の鉱山を開発した鉱山技術者の一群ではなかったか、と推察される。このように、古代豊国は、白頭山周辺のツングース系の鉱山技術者の集団が数多く存在したことが推理されうるのである。

六　国見のケベス祭りの源流

これまで述べてきたように、大分県には、朝鮮半島の影響が色濃く残存していることがわかったかと思う。

とりわけ、宇佐八幡宮周辺、三重町周辺に的を絞って考察してきた。最後になったが、国東半島にも朝鮮半島の残滓（ざんさい）が見られることである。これを論述しておく。

金属を融合する時に必要な物質は、燃料となる炭が不可欠であることは説明をまたないであろう。鉱物と燃料があれば、金属が融合されると思うが、そうではない。鉱物に含まれる不純物を展着するためには、石灰岩が欠かせない。これらが揃っている場所は、三重町をおいてほかにない。

稲積鍾乳洞のそばに蓮城寺と炭焼小五郎伝説とがある。特に、蓮城寺の秘仏は、百済観音である。百済からの仏師によって造られたことは有名である。だから、三重町に炭焼小五郎が伝承されているのである。

これらの集団が恐らく「移動した」(22)と思われる地が国東、正確には国見町である。姫島の対岸にある「岩倉社」(櫛来社ともいう)に古くから伝わる「ケベス」祭りも朝鮮語で解読できる。

ケベス祭り

トウバと格闘する奇妙な面を着けたケベス(国東町の岩倉社)

製鉄を韓国語で と 제철 書く。発音はチェ・チョルという。また、製鉄に欠かせない風を送る吹子には、二種類ある。堅い皮で作った鞴(フク)と、柔らかい皮で作った鞴である。このうち鞴は『大漢韓辞典』(23)によると「Pei ▶」と発音すると書かれている。さらに、我々は、よく運転手という。手は、顔や手ではなく、人間を表す。この字を韓国語で書けば 수 となり、発音は「ス」という。意味も同じである。これを纏めると、吹子を製造する人という言葉となる。このように考えると、「シダ」に火をつけ火を振り回す行事も「理解が容易」(24)となろう。発音は「チェペイス」と発音できる。何度も発音すると、「ケベス」(25)と聞こえてこないだろうか。

七 むすび

いろいろな視点から、大分県と朝鮮(半島)の関わりを考察してきた。その結論を述べると、遠く北朝鮮に聳える白頭山を源流として、加賀白山比咩神社に飛来して、宇佐八幡宮に伝来したと推測することができる。

大分県内では、宇佐八幡宮と関係の深い地域に朝鮮半島の影響が色濃いということができよう。この基層には、金属の融合という鍛冶の技術が大きく横たわっていることを再度述べておきたい。最後になったが、以上のヒントは、故松岡実先生が現地調査されたからこそ脱稿できたものである。再び深甚なる弔意を表明しておきたい。

【注記（参考文献）】

(1) 阿蘇大社の宮司、阿蘇さんにも確認したが、このような伝承があるといわれていた。

(2) 国東のホーヤク祭、玖珠の武内神社の牛馬信仰も朝鮮半島の影響が色濃い行事である。詳しくは、拙稿「八幡神成立考・・・古代日本と朝鮮」別府女子短期大学紀要第一五号参照。なお、玖珠や国東の行事は、宇佐八幡宮が祭祀する善神王との関係が深いばかりか、次の注に掲げるシャーマンとも深い関係にある。故松岡実氏も、宇佐八幡宮の善神王が解明できなければ、宇佐八幡宮の謎は解けないとおっしゃっていたが、私なりに善神王を解明した。

(3) 詳しくは、拙稿「八幡神成立考・・・古代日本と朝鮮」前掲大学紀要第一七号参照。シャーマンをより理解するために、中国・韓国を旅して取材することも付言しておきたい。

(4) 『大日本古文書　編之』（東京大学出版会）同書によれば、現在の下毛郡・中津の戸籍があるが、圧倒的に「秦」氏が多い。これに対して、豊後は戸籍の事例数が少ないため即断はできないが、極端に「秦」氏が少なくなっている。

(5) 玉井敬泉論稿「白山の祭神と信仰」（下出積與編『白山信仰』所収）なお、玉井敬泉氏と同様な主張は、山岸論稿「白山信仰と加賀馬場」（高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』所収）にも見られる。

(6) 大森崇著『神道の本』（学習研究社）

(7) 保井克己著『満州・民俗・言語』（満州事情案内所　康徳八年）

(8) 竹内亮著「白頭山」（『せふり』所収）

(9) 重松敏美著『求菩提山修験文化攷』（豊前市教育委員会）

(10) 小田富士雄論稿「古代の求菩提山とその信仰」（『特集・豊前修験道所収』）

(11) 英彦山については、『英彦山編年史料』を参考にした。なお、英彦山から水晶が産出することについては、寺島良安編『和漢三才図絵』にもその記述が見られる。

(12) 等覚寺については、松岡実氏の調査によった。渡邊重春著『豊前志』にも同様な記述がある。

(13) 求菩提山について『求菩提山修験文化攷』（前掲書）

(14) 松尾山医王寺については、松岡実氏の調査によった。

(15) 倉持山については、松岡実氏の調査によった。なお、『豊前志』にも調査と同様な記述がある。

(16) 檜原山正平寺については、松岡実氏の調査によった。なお、『豊前志』にも調査と同様な記述がある。なお、『豊前志』には求菩提山・等覚寺・松尾山・倉持山・檜原山がいずれも正月七日の晩に鬼絵を行なうと記述されていることに注目しなければならない。場所こそ違うが、これらの山々はそれぞれ関連あるものと考える必要がある。

(17) 仙岩山宝陀寺については、松岡実氏の調査によった。なお、『豊前志』にも調査と同様な記述がある。

(18) 御許山正覚寺については、松岡実氏の調査によった。

(19) 貫嶽権現については、松岡実氏の調査によった。なお、貫嶽権現について『太宰管内志』（伊藤常足　防長史料出版社）によれば、「頂有白山権現之社。社前有講堂云々。東有一峯、名水晶山」とあるので、水晶が産出していたと思われる。

(20) 三重町大白山（三重町旧白山村）については、松岡実氏の調査によった。なお、唐橋世済編『豊後国志』（文献出版）にも「水精石英」が産出すると記述されている。

(21) 野津町白山については、松岡実氏の調査によった。『豊後国志』に「在野津荘西神野村。碧峭翠壁。上有洞穴。内安祀祭白山権現」とある。

(22) 炭焼小五郎伝説によれば、炭焼小五郎の娘、玉依比売（玉依姫）が聖徳太子の父、用明天皇と結婚することが決まると、三重を出発して姫島周辺で嵐に遭遇する。その生け贄の代わりとして櫛を海に投げると凪になった。その櫛が漂着したところが、「岩倉社」であった。だから別名を「櫛来社」というのである。この伝承は、鍛冶の技術を持っ

た集団が国東半島に移動した傍証になるのではないかと考えている。

(23) 張三植編『大漢韓辞典』(教育書館韓国)

(24) ケベスの「面」にいくつかの疑問が残る。

(ア) 何故、この世のものとは思われない面が必要なのか

(イ) 「面」の左目が何故片寄っているのか

(ウ) 何故、火が必要なのか

(ア)からその疑問を解いてみよう。飯島吉晴著『竈神と厠神』(人文書院)によれば、「異界と此の世の媒介者として常人よりも片目や片足の不具者が好まれた」と述べていることが参考になる。

(イ)について。松岡実著『大分祭事記』(『アドバンス大分』昭和五六年)のケベス祭の描写の中で、「面をつけると左目があまりにも片寄っていて実際には見えない」と述べているように、左目は、「面」についているだけで片目であった可能性が高い。となれば、「片目を常人と区別して、神と人との媒介をなす者の印」と柳田國男著『一目小僧その他』(柳田國男全集六　筑摩書房)が説いているのが参考になろう。

(ウ)について。「ケベス役の者が火の中に入り、また出てくる」という再生と鍛冶を意味しているのではなかろうか。

このような点について、飯島吉晴氏(前掲書)は、「**金工(鍛冶鋳物師)も鉱石から竈(カマド)(火)を媒介として金属を得るという物質変容に従事するものであり、コモリ・中日・クダリというその変容工程はタタラ師によって一世と称され、一世毎に炉がこわされる点で死と再生の過程を見ることも出来る**」と述べていることが参考になるであろう。

以上をまとめると、「タタラ(鋳物師)の仕事では火の色と送風が重要であるが、タタラ師は火の色を片目で見るために、次第に左右のどちらかの目が悪くなって片目になることが多いと言われる。実際、タタラ師や鋳物師には片目になっている者がよく見られる」と飯島吉晴氏が述べている(前掲書)が、まさに卓見である。ケベス祭りは、片目のケベスが異界と此の世の媒介者を演じ、火による生命の再生をも含んでいると考えることができよう。

(25) ケベス火祭の由来について。末綱杵一氏は「ケベス祭りについて」(『大分県地方史』平成元年三月号所収)で次のようにまとめている。

① 神功皇后説むかし宇佐の神様(八幡神)が朝鮮出兵についてお征きになった。その時、虎狼が多く危険で眠ることが出来なかったので火を焚いた。火を蹴散らし、火を投げた。その故事がケベスの火である、という。

② 海人族との戦い説恵比寿(夷)神は魚をもたらす外からの善神で、呪術的霊力をもっている。この神を奉ずる海人族の侵入に対して土着の人びとが争った。海人族(ケベス)と土着(トウバ)の争いを表現したものである。

③ 鍛冶の火説宇佐八幡は鍛冶の神として示顕するが、鍛冶は当時の最新技術で火を尊び、厳しい精進潔斎をした。それが信仰に結びついたものではないか。

④ 外敵侵入説外敵に対して里人たちは火を焚いて海岸警備にあたっていた。これが神事化したという説、である。

これまで「ケベス火祭」について、数多くの論文が発表されたが、いずれの説も我々を納得させるものではないように思う。しかし、宇佐八幡宮が朝鮮半島の影響を色濃く反映しているのであれば、朝鮮語からアプローチするしか解決する術はないように思う。

吹子を製造し、その吹子を使って金属を融合する職人を表現した行事がケベス火祭の由来である。重複するが、この際に石灰岩が不可欠である。この石灰岩を三重町白山から運んできたのかもわからない。そして、その燃料も三重町から来たと推測しうる。これを運んだ者が、玉依比売であったのかもしれない。そして、その鍛冶の技術は、遠く加賀白山を出発して、日本海側を下って行ったと考えられる。事実、石灰岩は、日本海側に多数存在していることも述べておきたい。

(別府溝部学園短期大学・学長)